

# 見習いメイド

シスターズ外伝

沙織が受けた奉仕の手ほどき



岡下 誠

表紙イラスト：ねみぎつかさ

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『見習いメイドシスターズ外伝 沙織が受けた奉仕の手ほどき』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『見習いメイドシスターズ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 見習いメイド

*Apprentice Maid Sisters*

## ミスカーズ外伝

沙織が受けた奉仕の手ほどき

岡下 誠

表紙／ねみぎつかさ

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

## Characters

---

ひめみや さおり

**姫宮 沙織**

元お嬢様の見習いメイド。あまり笑顔を見せない静かなタイプ。

すぎむら ひさき

**杉村 尚樹**

大学生の青年。見習いメイドたちのご主人さま。

あまくさ みさえ

**天草 美冴**

三人の見習いメイドたちの指導役。

そうま ひなの

**相馬 姫奈乃**

奔放な性格の見習いメイド。性経験は豊富。

うてな はるか

**宇天奈 春香**

天真爛漫な見習いメイド。幼児体型。

見習いメイド姫宮沙織（ひめみや さおり）は、邸宅の台所で、明日の料理の下ごしらえをしていた。

頭に乗せているのは純白のカチューシャ。身にまとっているのは濃紺のブラウスとロングスカート。そして清潔なエプロン。

沙織は、見習いメイドの身でありながら、料理の腕を認められて、台所仕事全般をまかされていた。

それを沙織は誇りに思っていたし、ご主人さまのための料理を作るのは何よりも楽しい仕事である。

しかし今夜の沙織は心が晴れなかった。包丁を扱う手はのろのろとしており、停滞しがちだ。

「どうしたの？ 浮かない顔をして」

かすかに皮肉が漂う口調で声をかけられた。

沙織が振り向くと、そこには眼鏡をかけた女性が立っている。知的で伶俐な美貌の持ち主だ。

天草美冴（あまぐさ みさえ）。

杉村家に正式採用されたメイドで、沙織たち見習いメイドの教育係である。

「美冴さま……」

「ふふふ……聞くまでもなかったかしら？」

沙織はつい先日、この屋敷の若き主人である杉村尚樹ひさきと主従の契りを交わした。単なる家政婦としての役割を越えて、肉体まで捧げることを誓ったのだ。

良家の令嬢として育てられた沙織は、わけあつて杉村家の見習いメイドとなる。お嬢さまからメイドへの転落に、沙織は嘆き、戸惑った。心を閉ざし、冷ややかな無表情で仕事をこなすだけの日々が始まる。

だが、尚樹の邸宅にやつてきた時から、沙織の凍てついた心は少しずつ溶け始めていた。誠実で優しい尚樹の人柄にふれるにつれて、心に血が通い始める。

やがては尚樹に対して、主人への忠誠心以上の感情を抱くようになった。尚樹にも、他のメイドに対しても、冷ややかな令嬢メイドとして振る舞つてはいたが、尚樹への想いは抑えがたくなる。

その後いろいろな曲折はあつたが、尚樹と直接に主従の契りを交わした。密かに慕つていた尚樹とそのような関係になれて、沙織は天にも昇る心地である。生まれのままの姿で尚樹の足元にひざまずき、頭上に手ずからカチューシャをいただいた時、身も心もご主人さまに捧げることを誓つたのだつた。

普段のメイド仕事にもより一層の熱心さで取り組む。ご主人さまに食べていただくのだと思うと、料理にも熱がこもる。

特に今夜の料理には気合が入っていた。なぜなら、今夜は沙織が夜伽を命じられる予

定だからだ。腕によりをかけて料理を作るとともに、さりげなくニンクを入れた。

(ご主人さま……たくさん私を可愛がってくださいませ……)

しかし……。

沙織に夜伽が命じられることはなかった。

同じ見習いメイドの相馬<sup>そうま</sup>姫奈<sup>ひなの</sup>が、濃密な媚態でご主人さまを誘惑し、夜伽のお役目を横取りしたからである。

「私は……姫奈乃さんのようにふしだらな振る舞いはできません……」

「そうでしょうね。あなたはお嬢さま育ちですもの」

眼鏡をかけた教官メイドは、皮肉とも哀れみともつかない眼差しで沙織を見つめていた。

「でも、このままでは、尚樹さまの寵愛を得ることはできないわよ。寢室を覗き見しながらオナニーにふけるのね」

「わ……私は、そのようなことはいたしません」

「そうかしら？」

とはいえ、ご主人さまから可愛がっていただけなかったため、沙織の身体は欲求不満にうずいていた。もしこの先もずっとご主人さまのお情けをいただけなかったら、悶々とした肉体を自ら慰めてしまうかもしれない。

「あの……美冴さま……。相談したいことがあるのですが……」

「何かしら？」

眼鏡の奥にある怜悧な瞳は、沙織の相談内容を半ば察しているようでもあった。悶々としたうずきに灼かれながら、沙織は秘めてきた決意を告白する。

「私に……夜伽の手ほどきをしてください。ご主人さまに喜んでいただきたいのです……。料理だけではなくて……その……身体でも……」

言っているうちに、かあつと頬が熱くなる。めまいがするほどに恥ずかしい。

「いいわ。私も、あなたには夜伽の手ほどきをしなければと思っていたの」

美冴は妖艶な微笑を浮かべた。

「明日の夜から、女の手管をじっくりと教えてあげるわ」

美冴の知的美貌にたたえられた淫らな笑みに、沙織は一抹の不安を抱いていた。

そして翌日の夜……。

「み、美冴さまっ……そんな……話が違いますっ。こんなこと……お許しくださいっ……」

恥ずかしさに身悶えする沙織を、眼鏡の教官メイドは微笑とともに見下ろしている。

「何が違うのかしら？ これも、夜伽の手ほどきのうちよ」

沙織は、肘掛け椅子に座らされていた。

いや、座らされているというよりも、縛りつけられていると表現した方が正しい。

両手は、背もたれへまわされ、革手錠をかけられていた。

そして両脚は、膝を折り曲げた形で大きく割り広げられ、足首を肘掛けにくくりつけられている。ふしだら極まりない開脚姿勢だ。

濃紺のロングスカートは、太腿の付け根までまくり上げられていた。沙織が身につけているメイド服のスカートは、足首まで届くほどに裾が長い。お嬢さま育ちの沙織は、みだりに肌をさらしてはならない、という意識が強く、常に足首丈のロングスカートを穿いているのだ。

しかし、気品あふれるロングスカートは今や大きくまくり上げられており、その奥の秘めやかな肌があらわになっている。

(いや……こんな格好……)

つい先ほどまで穿いていた下着は、美冴の手で剥き下ろされてしまった。女として最も秘めておきたい器官がさらけだされている。椅子の座面へ浅く腰かけさせられているので、淡い陰毛に飾られた女唇がこれ見よがしに突き出されていた。

気品あふれるロングスカートは、剥き出しの股間を演出するための装飾品に成り下がっていた。優美なスカートがまくれ上がっていることで、かえって淫らさが際立つのだ。

また、沙織がいつも穿いているオーバーニーソックスも、淫靡な演出に一役買っていた。肌を隠したいという沙織の思いとは裏腹に、太腿から上の肌が強調されてしまう。最も隠

しておきたい秘め肌だけがことさらに剥き出しになっており、それが淫猥さをかもし出していた。

「あああ……お願いですから、目をつぶってください……ご主人さま……」  
そう。

沙織の恥ずかしい姿を見ているのは、美冴だけではない。主人である尚樹も、喰い入るような眼差しで沙織を見つめていた。

ここは尚樹の寝室である。

尚樹はナイトガウンを身にまとい、緊張と興奮の入り混じったような表情でベッドの縁に腰かけていた。

（ああああ……ご主人さま……どうか、こんな私を見ないでください……）

いくら沙織が尚樹のことを慕っているとはいえ、このようにあられもない姿を見られるのは恥ずかしい。恥辱に灼かれて身体が熱くなる。

恥ずかしさに懊惱おうのうする令嬢メイドを、美冴は微笑とともに見下ろしていた。

「恥じらいの心を忘れないのが沙織さんのよいところだけれど、あまり恥ずかしがってばかりでは、ご主人さまに喜んでいただけないわよ」

眼鏡の奥にある瞳は、淫らな嗜虐をたたえている。

「夜伽の手ほどきをするにあたって、まずは恥ずかしさに慣れてもらおうわ」

「そ、そんな……ご主人さまの見ている前でするなんて……」

沙織は、訴えかけるような眼差しで尚樹を見る。

尚樹は顔を赤らめて視線を宙にさまよわせていた。

もし剃毛されようとしているのが姫奈乃であつたら、尚樹は喰い入るようにつめていただろう。尚樹にとって姫奈乃は、エッチなお姉さんである。おのれの中の淫らな欲望を素直にぶつけられるのだ。

しかし、尚樹にとっての沙織は、恋人のような存在であり、高嶺の花の令嬢でもある。気恥ずかしさというか、罪悪感というか、自分の欲望をさらけださせない。

令嬢メイドの淫らな姿を見たいという男心と、それへの罪悪感との間で板挟みになっている。沙織の心情を配慮して、尚樹が顔を背けようとしたその時……。

「なりません、尚樹さま」

眼鏡をかけた教官メイドが冷ややかな声で制した。

「メイドの躰しつけをするのは私の役割ですが、それを監督するのは尚樹さまのお役目です。目を逸らしたりなさりませぬように」

「で……でも美冴さん、沙織さんの意思に反してするのは……」

「夜伽の手ほどきをして欲しいと申し出てきたのは沙織自身です。尚樹さまの寵愛を受けたいとの思いがそうさせたのですわ。尚樹さまが目を逸らしたら、沙織のためになりませ

ん」

「わ、わかったよ……美冨さん……」

この邸宅の主とはいっても、尚樹は美冨に頭が上がらないのだ。

美冨は、沙織の方へ向き直る。

「沙織さん、ご主人さまにあそこを見られて、恥ずかしいかしら？」

紅潮した顔を自覚しながら沙織はうなづく。

「ふふふ……でも、これからもっと恥ずかしい目にあうのよ」

淫らかな微笑とともに美冨が取り出したのは、磨き込まれた剃刀。

「ひっ……」

鋭利な刃物をちらつかされて、沙織は思わず小さな悲鳴をもらした。

「主従の契りを交わした主人には、陰毛にさえ覆われていない剥き出しのあそこをご覧いただくのが礼儀よ」

「そ、そんな……。お許しください、美冨さま……」

恥ずかしさにさいなまれて、沙織は身をよじった。しかし、両手首両足首をがっちり椅子にくくりつけられているため、剥き出しになった股間がうねるばかりだ。

美冨は、割り広げられた脚の真正面に陣取る。身をかがめて尻を尚樹の方に突き出しながら、シェービングムースを吹きつけた。

「そんなに腰を揺すって……。ご主人さまに見られながらの剃毛がよほど嬉しいのね」

「ち……違います……んあ……」

淫靡な手つきで女唇へ塗り広げられる。

「んうう……んんっ……んっ……」

開脚姿勢で拘束されたまま、令嬢メイドはかすかに身体を揺すった。

美冴の手つきは、ムースを塗り広げているというよりも、女唇そのものを愛撫しているかのようなのである。女唇の盛り上がりへ指腹がねちねちと這いまわり、ふしだらな喜びをかき立てられてしまった。

「んああ……み、美冴さま……。そんなところまで……ひああつ……」

女陰門の地肌ばかりでなく、小陰唇の花びらにまで泡を塗りつけられる。女の性感を知り尽くした指づかいで、ムースを姫花びらへすり込まれた。

「念のため、粘膜にも塗る必要があるのよ。あそこをほぐしてやわらかくする意味も込めてね……」

美冴の指腹でこすられるたびに、甘美なしびれが火花となつて散る。

昨日、夜伽を命じられなかったため、沙織の肉体は悶々としたうずきに見舞われていた。さらに、性の手管に長けた教官メイドから淫らに弄ばれ、お嬢さま育ちのメイドは快楽を味わわされてしまう。

そして、姫奈乃の舌づかいを思い出しながら、亀頭に舌を這わせる。

しかし沙織の舌づかいは、姫奈乃の妖艶な舌愛撫には遠くおよばなかった。唇の間からわずかに舌を覗かせ、遠慮がちに舐める程度である。その姿は、街に出た令嬢が、口元を気にしながらアイスクリームを舐めているかのようだ。

「恥ずかしがらずに、もつと舌を伸ばして。すぐに舌を引つ込めないで、じっくりと亀頭に這わせるの」

お嬢さま育ちの沙織は、食事の時にさえ舌を伸ばすことなど決してない。

それなのに今は、はしたなく舌を伸ばして、男性の象徴を舐め上げるように命じられたのだ。

ご主人さまに喜んでいただくためとはいえ、恥ずかしさを払拭しきれない。

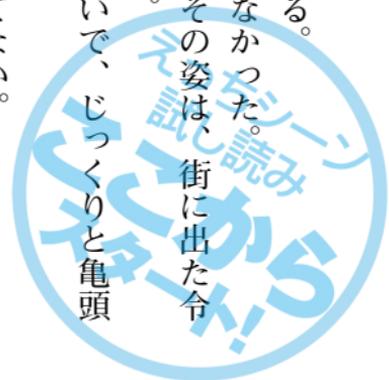
「沙織さんには、お尻を叩くよりも、こうする方が効き目がありそうね」

尻の合わせ目をなぞり下ろされ、谷底に息づいている小さなすばまりをまさぐられた。

「んひいいいっ」

尻肉を平手打ちされた時よりも、ずっと大きな悲鳴が上がる。

不浄の器官を弄ばれて、沙織は恥ずかしさとおぞましさに身をよじった。教官メイドの手を払いのけたいのだが、両手首を革手錠で拘束されている。沙織にできることといえば、尻肉をくねりまわすことだけだ。



「ひっ……ひいいい……美冴さまっ……お許しをっ……」

しかし、どんなに激しく尻を揺すろうとも、美冴の指腹は蛭のように肛門へ吸いついて離れない。それどころか、尻を揺すれば揺するほど、美冴の指先はますます淫靡に蠢いて、沙織の尻穴を責め立てた。

「ご主人さまへの奉仕がまたおろそかになってるわよ。言われた通りにできないのなら、もっと恥ずかしい目にあわせるわよ」

「し、しますから……お尻は……お許しください……」

むずむずとしたおぞましい感覚を前にして、舌を伸ばすことへの羞恥心など吹き飛んでしまった。唇の外へ舌を差し出し、亀頭に押し当てる。ねっとりとして舐め上げた。

「亀頭全体を唇の中にくわえ込みなさい」

美冴の指先は、いまだに尻穴へ吸いついている。淫らな蠢きはおさまったが、沙織の態度次第ではいつでも淫弄を再開することだろう。

それに怯えて、沙織は大きく唇を広げた。令嬢にあるまじき大口を開けて、亀頭の張り出し部分までくわえ込む。

「しゃぶるようにしながら唇でしごくの」

浅ましい開口を強いられながらも、肥大した亀頭を唇でしごき上げた。まぶたを伏せ、うやうやしい表情でご主人さまのものを吸いしゃぶる。

「そうよ。その調子……。ご褒美をあげるわね……」

美冴は、もう片方の手を沙織の秘唇にやった。人差し指と中指を女肉穴へ打ち込む。

「んうううっ……んう……んあぁ……」

男性器の先端をしゃぶりながら沙織は歓喜に悶える。ご主人さまの舌愛撫で気をやらされた女肉穴は、やわらかくほぐれていた。同性の指二本をすんなりと受け入れたのみならず、きゆうきゆうと喰い締めて性的快楽を貪る。

（んあ……あぁん……み、美冴さま……そこをかきまわされると……はうう……んはあ……）

ご褒美の名のもとに女肉穴をえぐり抜かれ、かきまわされ、歓喜の音色を奏でられた。教官メイドは女性の性感を熟知しており、思うがままに沙織の官能を刺激する。

官能の炎にあぶられて、沙織は尻肉をうねりまわしてしまふ。はしたないと知りつつも腰を揺すらずにはいられないのだ。

「お嬢さまとは思えないほど淫らな腰づかいね。上品な令嬢でも、ベッドの上ではふしだらに乱れるのかしら？」

椰揄された恥ずかしさをまぎらわすかのように、沙織はご主人さまのものにむしゃぶりつく。発情した牝のように激しく吸引し、また、崇拜するかのようにうやうやしく舌を捧げた。

「笠の裏を舌先でなぞったり、割れ口を吸ったりするのよ」

美冴は、尻穴への責めと女陰への愛撫を使い分けて、沙織に口唇奉仕の作法を教え込んでゆく。

（ひああっ……んうう……お尻は……お許しくださいっ……）

尻穴への責めに怯えつつ、沙織はご主人さまのものに奉仕した。男の象徴に舌を這わせ、先汁にぬめった亀頭を吸いむしゃぶる。

「んうう……んっ……んうう……ご主人さま……」

自分がどんなに恥ずかしいことをしているのか自覚ながらも、沙織は口唇奉仕にふけつていた。教官メイドからのお仕置きが恥ずかしいのもあるが、ご主人さまのものに尽くすことそのものが嬉しいのだ。

令嬢としての恥ずかしさ以上に、メイドとしてのご奉仕に喜びを見出している。

「どう？ 尚樹さまの味は？」

「ふあ……はい……。とても……おいしいです……」

それは、沙織の偽らざる心情である。愛しいご主人さまのものだと思ふと、男根の濃密な臭気にすら官能を刺激されてしまう。

亀頭の縫い目をついばみながら、沙織はご主人さまの顔を見上げた。

（ああああ……今、この瞬間だけは、ご主人さまは私だけのもの……）

沙織は、ご主人さまの顔をまともに見ることさえできない。視線を宙にさまよわせ、太腿をわずかに広げた。

首輪から伸びた鎖の端は、ご主人さまの手に握られている。鎖と淫器具を通して沙織はご主人さまに支配されていた。いや、支配されているというよりも、沙織が心と身体を捧げているのだ。

気が遠くなるような恥ずかしさにさいなまれながら、沙織は股間に意識をやった。尿口をゆるめるように念じるのだが、身体が反応してくれない。

「仕方がない娘ね。今回だけは手伝ってあげるわ」

教官メイドが沙織の背中に寄り添い、両腕を腰に絡めてきた。剃毛された女陰門を左手で割りくつろげられる。咲きめくれていた花びらは左右に分かれ、濡れそぼった膣穴から尖り立った女蕾までがあらわになった。

淫器具の振動や股縄の摩擦に責められて、そこは牝欲の坩堝となっている。女肉穴からは熱い蜜があふれ、感じやすい女蕾は包皮から剥け出ていた。

そして尿穴は、かたくなに口を締めている。

「たっぷりとおしっこをなさい……」

女蕾と尿穴に指の腹をあてがわれ、細かな振動で責め立てられた。

「ひいっ……ひいっ……んああああ……」

最も感じやすい肉粒と、おしっこを排泄するための小穴。二つを同時に刺激され、快楽と尿意をともに味わわれる。後ろ手に拘束されたまま上半身をよじらせた。

「み、美冴さま……そこは……そこは……あんっ……ひああああ……」

腰をくねらせて指先から逃れようとするのだが、教官メイドの指は蛭ヒルのように吸いついて離れない。

執拗に女芯を弄ばれているうちに、下半身は快感にしびれ、腰をくねらせることさえままならなくなった。オーバーニーソックスを履いた脚からは力が抜け、立っているのがやつとだ。

快楽にあてられてあらがうことができなくなった沙織を、美冴はさらなる淫靡さで弄ぶ。「んあああ……し、しごかないでください……立っていられなく……あひいっ……粗相を……粗相をしてしまいます……」

「尚樹さまに立ち放尿を披露するんでしょ。おしっこ穴をゆるめて、おもらしをご覧にいなさい」

ぶつくりとふくらんだ女芯を根本からしごかれたかと思うと、一転して尿穴を揉みこねられた。快楽に灼かれていた女体は、いきなり尿口への悪戯にさらされて、極度の尿意が突き上げられる。

全神経を集中して尿口を締めると、今度は剥き身の女芯をこすり上げられた。尿意への

備えがおろそかになるのを見計らったように、尿穴を揉みまわされる。

女芯と尿穴を代わるがわるに責め廻られて、刺激に慣れることができない。それどころか、責めの箇所が移るたびに、恥辱の刺激は肉体のより深くまで蝕んだ。

「あああ……あん……んあああ……私……もう……もう……」

ここが庭であることも忘れて、沙織は快楽と尿意に悶え啼く。女体は官能に溺れかけ、尿口は排泄欲に懊悩してひくひくと収縮していた。

「ご主人さま……はしたない私を……どうか……お許してください……」

すがりつくような眼差しでご主人さまを見つめた。見ないで欲しいという想いと、見て欲しいという想いとが交錯する。

美冴の指がひととき淫らに蠢き、女芯と尿穴をともに弄んだ。

女芯で奏でられる快感に屈して、尿口の締めつけを一瞬だけゆるめてしまった。膀胱に溜まった尿水は、わずかに開いた出口へ押し寄せる。

「ひいっ」

めまいがするほどの解放感。

ぷしゅっ……ぷしししししし……。

勢いよく尿水がほとばしる。

緊縮していた尿口が一気にゆるんだため、その落差が快楽となって響き渡った。

「んああああああああ……」

激しくおしっこを噴き出しつつ、沙織は歓喜の声を放つ。女芯を揉み転がされる快感と、放尿の喜び、そして淫器具のもたらす刺激が、それぞれに共鳴する。

ご主人さまの前でだらしなく尿水をほとばしらせながら、沙織は女の喜びを極めた。

庭の片隅に生えた樹の根本には、沙織の女陰から噴き出した尿が水たまりとなっていた。わななく美脚の付け根、股間に刻まれた割れ目からは、今も雫が滴っている。

「ふふふ……。ずいぶんと溜まっていたようね。良家の令嬢でも、メイドでも、あそこからは同じようにおしっこをもらすのよ」

美冴にからかわれて、沙織は顔を上気させた。姫奈乃や春香の視線も、恥辱の刺激となつて沙織を灼く。

そして何よりもご主人さまの視線……。

欲望のこもったその眼差しは、沙織を羞恥に悶えさせるとともに、秘めやかな興奮をかき立てた。

(ご主人さま……。はしたない私の姿……。ご覧にならないでください……)

心の中ではそう念じるのだが、身体は喜びにうずいている。最愛のご主人さまから欲望の視線をあびせられて、高ぶりを覚えずにはいられない。特に、太腿と太腿の間に息づく

姫花肉は喜びに喘ぎ、粘ついた汁をもらしてしまふ。

尿口からはおしっここの雫を滴らせ、膣口からは発情の蜜汁をもらしているのだ。二重の意味で牝恥である。

「おしっこを滴らせているだけじゃなくて、はしたない涎まで垂らしているのね。良家の令嬢にあるまじき淫らさだわ」

教官メイド・美冴は、沙織の腰に腕を絡めたまま、濡れ潤んだ女陰に指を遊ばせた。二種類の体液を指先ですくい取り、包皮から剥け出た女蕾を揉み転がす。

「んあああ……あああ……あんっ……」

氣をやつてぐったりとしていたところに、さらなる快楽を奏でられ、沙織は黒髪を揺らしてよがり悶えた。

「女ですものね。敏感な蕾をつぼみいじられれば感じてしまふわ」

尿水の滴りはなくなつたが、今度は蜜汁の滴りが止まらない。

沙織の女肉穴は、快楽に喘ぐとともに、欲求不満にむせび泣いている。かれこれ一週間近くも、ご主人さまの生身をいただいていない。そのため、膣穴は物欲しげに蠢きながら、じくじくと蜜の涙を流していた。

「沙織さん。尚樹さまのものが欲しいのでなくて？」

「は……はい……」

美冴にだけ聞こえる程度の小さな声で沙織は欲望を告白した。

「だったら、尚樹さまにお願いなさい」

「ですが……女の身である私からは……」

「ふふふ……これだけ恥ずかしい姿をさらしたのに、いまだに心は令嬢の気高さを失っていないよね」

下半身に着けているものといえば白のオーバーニーソックスだけで、女陰も尻もさらけだされている。しかも、女の象徴たる姫花肉は、発情の蜜と尿水に潤んでいるのだ。

良家の令嬢にふさわしからぬ牝恥をさらしながら、沙織はなおも気品を漂わせている。「でも、あなたの口からおねだりをしなければ、尚樹さまの寵愛は得られないわよ」

大腿同士をこすり合わせながら沙織は顔を伏せた。肉体、殊に女陰は悶々としたうずきに泣いている。しかし、令嬢としての慎みが、他人を前にしておねだりをためらわせていた。

「こうやっておねだりするのよ」

耳元をくすぐる美冴のささやき。その内容は、ご主人さまと二人きりの時でさえはばかられるものであった。

ましてや姫奈乃や春香が見ている前でするなど恥ずかしすぎる。

沙織は小さくかぶりを振った。

「尚樹さま、股間をあんなにふくらませていらつしやるわ。沙織さんがおねだりしないなら、姫奈乃さんか春香さんが夜伽を申し出るでしょうね……」

「そ……それは……」

放尿披露までしたというのにご褒美をいただけなのは惨めだ。

「どうするの？ おねだりをして可愛がっていただくか、姫奈乃さんと春香さんの夜伽奉仕を見ながらオナニーするか……」

手首にはめられていた革手錠をはずされた。もし、目の前で夜伽がなされたら、手が股間に伸びるのを抑えることができないうらう。

「し……します……。おねだり……」

恥ずかしさに顔を火照らせながら、沙織は樹の幹に片手をついた。剥き出しの尻肉をご主人さまの方へ向ける。右手を太腿の間にくぐらせ、ぐしよ濡れになった女陰門を割りくつろげた。

「ご……ご主人さま……。どうか……私にお情けをくださいませ……。ご主人さまのものを拝見しながら……その……」

恥ずかしさのあまり、ご主人さまの姿を正視できない。

「じ、自慰をするのが……ふさわしい私ですが……遅いものでお慈悲をください……」  
ご主人さまの寢室を覗きながら自慰にふけっていた自分を思い出してしまい、灼けるよ

うな恥ずかしさに懊悩した。

「おしつこと蜜汁にまみれたあそこですが……ご主人さまの逞しいもので……お情けをくださいませ……」

美冴に指示された通り、尻肉をうねり舞わせる。気が遠くなるほどに恥ずかしいのだが、肉体は高ぶる一方だ。ご主人さまの視線を感じ、割りくつろげた女陰は喜びと期待にうずく。たつぷりの蜜に押し流されて、膣内に埋め込まれた淫器具が、ぬろんと抜け落ちた。

尚樹は鎖の端を美冴に渡し、ズボンのファスナーから男性器を引きずり出す。令嬢メイドの尻肉を両手いっぱいにつかみ、いきり立った男根を無毛の女陰門にあてがった。

「沙織さんのおしつこ姿、とつても可愛かったよ。ご褒美……あげるね」

「あああ……ご主人さま……」

肉体の奥から湧き上がる喜びが、熱い喘ぎとなつてもれる。ご主人さまの生身を押しあてがわれて、膣穴はだらしなく涎を滴らせた。

「いくよ……」

牡欲にたぎり立った男性器を、濡れそぼった女肉穴にえぐり込まれる。

ぬぶぶぶつ……。

張り出しのきいた亀頭で、秘めやかな粘膜をこすり上げられた。

「んはああああああ……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**